たるみず市の
歴史と文化財

牛根麓稲荷神社の埋没鳥居
（垂水市天然記念物指定）

垂水市教育委員会

平成 26 年 3 月

地名の由来

垂水の名が歴史に登場したのは、保安元年（西暦 1120）宇佐八幡宮より来た上総介舜清（かずさのすけしゅんせい）が、垂水（荒崎）城主となった時とされています。この地は火山灰シラス台地で水晶のような清らかな水が湧き、「垂る水」が語源になったとも、大隅の中心で海山のものが足り満ちていたので「タリミチ」が転じて垂水になったとも言われています。

はじめに

垂水市は大隅半島の玄関口と言われ、南北 37 キロの海岸線を有し、目の前に桜島と錦江湾、後に高隈の山々が連なり、対岸には薩摩半島を望み、遠くに開聞岳や霧島山を見ることができます。

温泉も各地に湧き、古くから風光明媚な景勝地として知られています。

また、連綿と続く歴史と文化が息づき、教育、文化の町として栄えてきました。

縄文時代晩期の柊原貝塚は国指定級とされ、平家落人伝説、中世豪族たちの争い、関ヶ原の合戦に敗れた宇喜多秀家の潜居、垂水島津家の統治などの史実のほかに、高名な文化人も輩出しています。市内いたるところに有形無形の文化財が点在し、県下最古級の木彫りの勝軍地蔵や野辺の田の神像が昔を偲ばせ、季節になると、伝統行事や郷土芸能が行なわれています。

このガイドブックにはふるさと垂水市の歴史と文化財をわかりやすく掲載いたしました。

ガイドブックを手にして親子で、友達同士で出かけてみませんか。

皆様にとって、垂水市の歴史と文化財を知る手助けになれば幸いです。

垂水市教育委員会
教育長　長濱重光

目　次

埋蔵文化財 …… 3～4
～古代のロマン、国指定級の柊原貝塚ほか～

中世の豪族 …… 5
～地方豪族が覇権を争った時代～

垂水島津家 …… 6～7
～薩摩藩 77 万石を支えた一門家～

彫刻、天然記念物、名勝、史跡、書籍・典籍 …… 8
～いにしえより伝わる人々の生きた証～

田の神 …… 9
～野辺にたたずみ豊作を祈る～

郷土芸能、伝統行事 …… 9
～後世に伝えたいふるさとの宝～

垂水人形 …… 10
～素朴な土人形・鹿児島県伝統的工芸品～

民話・伝説 …… 10
～「江之島弁財天」「河童と尻無（しりなし）みな」～

近世垂水の偉人 …… 11
～和田英作と瀬戸口藤吉～

文化財マップ …… 12

埋蔵文化財

～古代のロマン、国指定級の柊原貝塚ほか～

美しい自然に囲まれたわたし達のふるさと垂水には、昔から多くの人々が暮らしており、たくさんの埋蔵文化財が残されています。

❶ 柊原貝塚

柊原下にある遺跡です。貝塚は、貝のカルシウム分により通常の遺跡では腐敗してしまって残らない骨や種子等が残っている貴重な遺跡ですが、柊原貝塚は非常に保存状態が良く膨大な情報量をもった遺跡で、とても貴重な遺跡として全国的に有名です。

調査中、多くの出土品が発見されましたが、この出土品自体も当時の様子を知る上で貴重な資料であるということで、平成 24 年（西暦 2012） 4 月、224 点が鹿児島県指定文化財として指定されました。

❷ 横道遺跡

横道遺跡は、垂水カントリークラブのゴルフ場造成に伴い、平成６・７年度に発掘調査された遺跡です。

遺跡からは、弥生時代後期（約 1800 年前）から古墳時代（約 1500 年前）にかけてのいろいろなものが出土しました。縄文時代の土器、古墳時代の土器、古墳時代の鉄器（やじりなど）などが出土しています。

いろいろな時代の遺物が出土していることや、遺物が出土したのはすべて急傾斜の谷からであることから、この谷の上の丘にある遺物が流れ込んだものと考えられます。

❸ 後迫 A 遺跡

後迫Ａ遺跡は、農免農道整備事業に伴い平成８年度に発掘調査された遺跡で、柊原小学校の裏地の、旧国鉄大隅線鉄道跡地内に位置します。

遺跡からは、古墳時代（約 1500 年前）の土器溜り（一定の範囲から集中して土器が出土する場所。一般に土器の廃棄場と考えられる）が４基出土しました。出土遺物の大半はこの土器溜りから出土したものです。

古墳時代の土器（他に類例を見ないものなど貴重なものも含まれます）や 12 世紀ごろのやきもの（青磁碗・白磁皿）などが出土しています。

❹ 宮下遺跡

宮下遺跡と隣接する小房迫前遺跡は、ほ場整備事業に伴い平成６年（西暦 1994）に発掘調査がされました。新城の鉄道公園周辺に位置します。

宮下遺跡から出土した代表的な遺構には、弥生土器を伴う竪穴式住居があります。また、古墳時代の層からは、地面が階段状に連なった跡がみつかりましたが、料学分析をしたところ、ここは棚田（水田）として利用されていたことがわかりました。

小房迫前遺跡からは、古墳時代（約 1500 年前）の住居跡や土器などが出土しています。

❺ 宮ノ前遺跡・重田遺跡

垂水市新城にある宮ノ前遺跡と、隣接する重田遺跡は、農道整備事業にともない平成 11 年度から平成 12 年度にかけて発掘調査が行なわれました。

宮ノ前遺跡からは、縄文時代後期（約 4000 ～ 3000 年前）から近世（約 200 年前）にかけてのいろいろなものが発見されました。

重田遺跡から縄文時代前期後半（約 5500 年前）の曽畑武土器や縄文時代中期初頭（約 5000 年前）の深浦式系土器などが発見されています。今のところ（平成 25 年４月現在）垂水市で発掘された最古の遺跡です。

❻ 迫田遺跡・森田遺跡

迫田遺跡と隣接する森田遺跡は、農道整備事業に伴い、平成 11 年度及び 14 年度に発掘されました。垂水市中俣の旧国鉄大隅線鉄道跡地内に位置します。

迫田遺跡からは、古墳時代（約 1500 年前）の成川式土器を始め、いろいろなものが見つかっています。また、鉄剣も１振発見されています。

森田遺跡からも、古墳時代のいろいろなものが見つかっています。

❼ 西ノ原遺跡

西ノ原遺跡は、平成 17 年９月の台風 14 号による災害復旧工事に伴い、平成 19 年度に発掘調査されました。牛根麓に位置します。

西ノ原遺跡からは、古墳時代（約 1500 年前）の土器溜りが検出され、成川式土器が大量に発見されました。

中世の豪族　～地方豪族が覇権を争った時代～

平安末期から安土桃山時代までは、争乱、群雄割拠の時代。垂水でも豪族たちの争いが起こります。

社領をめぐる争い、荘園の蚕食（さんしょく）による紛争を鎮圧するため、西暦 1120 年、宇佐八幡から上総介舜清（かずさのすけしゅんせい）が来るも、荘園はますます旺盛となり、この地は近衛家荘園となります。後に鎌倉幕府は守護職に島津氏、その下に肥後氏、石井氏を地頭として任命しました。南北朝時代には肥後氏は南朝に属し、島津氏と戦いました。

西暦 1412 年、伊地知氏が地頭となり下之城（本城）に、牛根の地頭、池袋氏が牛根城に、田上城に梶原氏が居城しました。西暦 1522 年に肥後氏、西暦 1526 年石井氏が没落して、伊地知氏の勢力が強くなります。

伊地知氏、高山の肝付氏、根占の祢寝（ねじめ）氏連合軍と三州統一を目指す島津軍との間に十数年にわたる大擾乱（だいじょうらん）が起こりました。始めは肝付連合軍が優勢でしたが、激戦を重ねた末、下大隅の早崎、小浜、牛根城を失って西暦 1574 年、ついに伊地知氏は島津氏に降伏しました。その後、伊地知氏の領地は鎌田氏、川田氏、敷根氏に分割され、伊地知氏は僅かに下之城のみを与えられました。

西暦 1599 年、島津家第 15 代太守貴久の次弟忠将（ただまさ）の子、以久（ゆきひさ）が下大隅の領主となった時、地頭は廃せられ、以後、明治維新までこの地は垂水島津家が支配しました。

山城・古戦場

❽ 田上城

梶原氏築城と言われています。

鎌倉幕府も北条氏の勢力が強くなった頃、梶原景時は鎌倉を追われ、島津忠久を頼り、薩摩へ逃れ、秘密裏に築城されたと言われています。

城主：梶原氏→祢寝氏→敷根氏

❾ 高城

肥後氏は種子島氏の祖となっている平姓肥後守信基の支族で平清盛の曽孫とも言われています。高城は信基の二男、信行の築城とされ、時代は北条氏が執権となった初めごろと言われています。

城主：肥後氏→伊地知氏→鎌田出雲守政近

❿ 本城（古くは下之城）

伊地知氏の城址、伊地知氏は戦国時代、豪族たちが興亡盛衰を繰り返す中にあって肝付、祢寝と手を取り合い、薩摩の島津氏に対抗しました。

城主：池袋氏→伊地知氏

⓫ 垂水城（荒崎城）

保安元年（西暦 1120）宇佐八幡宮より来た上総介舜清が最初の城主と言われています。この時期は平治の乱より 30 年、頼朝が守護地頭を全国におく 66 年前で白河院政期の末ごろです。当時、垂水で神戦があり、神貫大明神と手貫（たぬき）大明神が争い、舜清の下向は神貫大明神の援軍ではないかとされています。

垂水城はしばらく廃城となりますが石井氏、伊地知氏、川田氏、島津氏を経て、林之城築城後は廃城となり、現在に至っています。

⓬ 牛根城

松ヶ崎城とも入船城とも言われています。源氏の追手に備え、平氏が砦を築いたと言う説も。後に牛根氏、池袋氏、建部宗政、本田薫親（ただちか）、肝付兼続、安楽備前守らが城を守ってきました。

⓭ 咲花平

三州統一のため、島津氏は肝付、祢寝、伊地知連合軍と十数年の間、激しく戦い、この地も２度戦場となりました。島津義久は弟歳久に命じ、ここを攻めさせ、島津勢の急襲に肝付、伊地知の兵は退路を断たれてしまい慌てふためき断崖から飛び降りました。その様が花が散るように見えたため、ここは「咲花平＝サックァビラ」と呼ばれています。

また、肝付方の大将、河南安芸守は唐傘を落下傘にして降り立ったという妖説もあります。

垂水島津家　～薩摩藩 77 万石を支えた一門家～

垂水島津家は一門家（加治木・重富・垂水・今和泉）の一つで鹿児島藩最高位の家柄です。初代忠将から 16 代貴暢（たかみち）まで続き、約 260 年間垂水を治めました。

福山の廻で戦死した初代忠将の子、２代以久は慶長４年（西暦 1599）垂水城（荒崎城）に居城しますが、徳川幕府の命で同８年（西暦 1603）日向の佐土原へ移封、初代佐土原藩主となります。朝鮮出兵で病死した３代彰久の妻、“新城様”は 16 代太守島津義久の娘です。４代久信は慶長 16 年（西暦 1611）、林之城（はやしのじょう）（現垂水小学校）を築城し、垂水城から移ってきます。島津久章（久信の庶子）を初代として寛永 13 年（西暦 1636）新城島津家が創建されました。

７代の久治から始まったよめじょ川疎水工事は、９代貴儔（たかとも）の時代に完成、享保５年（西暦 1720）には柊原村、野里村を合し、家禄 18,000 石となりました。また、現在の垂水市の商店街が出来たのもこの頃です。

藩政時代、垂水は学問が大変盛んで、10 代貴澄は安永５年（西暦 1776）、学問所「文行館」を創設しました。

９代貴儔の長女都美の孫は、11 代将軍徳川家斉に嫁いだ茂姫（広大院）です。

14 代貴敦の妻八百姫（やおひめ）は、25 代太守島津重豪の孫で、13 代将軍徳川家定の御台所として候補に挙がった人です。八百姫は茂姫の姪に当たります。15 代貴徳は垂水市内の小学校長を務め、16 代貴暢は男爵となり、妻の草子（そうこ）は我が国最初の女性医学・文学博士となりました。

⑭ 垂水島津家墓地（垂水市指定史跡）

⑮ 宝篋印塔（ほうきょういんとう）「９代貴儔公」の墓

⑯ 巨大な六地蔵塔

⑰ 島津家菩提寺「成就院（じょうじゅ）」跡

⑱ 徳川 13 代家定正室候補「八百姫」の墓

⑲ 島津草子医学文学碑

⑳ お長屋（垂水市指定史跡）

400 年以上の歴史を持ち、貴重な木造建築物です。下級武士の詰め所とされています。

㉑ お長屋（北側）

㉒ 居城林之城跡（現垂水小学校）

垂水城（荒崎城）が手狭になったので、垂水島津家４代領主久信は、慶長16年（西暦1611）林之城を築城し、家臣団とともに移ってきました。当時は山林原野だったため「林之城」と言われていましたが幕府の一国一城令により後に、「館」「お仮屋」と呼ばれるようになりました。

㉓ 林之城築城記念碑

㉔ 初代忠将を祀る「御殿加神社（おでんか）」

㉕ 武家門

㉖ 蔵

㉗ 昔をしのばせる麓町

㉘ 疎水墾田の碑

垂水島津家７代久治、８代忠直、９代貴儔の３人のお殿様は本城川から分水（よめじょ川）し、垂水市の水之上などに広大な田園地帯を作りました。総事業費（３万両＝現在の約50億円とも言われています。）

㉙ 学問所「文行館跡」

㉚ 新城様の墓（垂水市指定史跡）

新城様は島津16代義久の二女で垂水島津家３代彰久に嫁し、化粧料として新城、鹿屋、高須等3,700石を賜りました。後に子、久信の庶子久章に化粧料をゆずり、新城島津家を創立しました。

㉛ 新城島津家お仮屋跡

㉜ 鹿児島県民交流センターに建つ垂水市島津家屋敷跡の碑

彫刻、天然記念物、名勝、史跡、書籍・典籍

～いにしえより伝わる人々の生きた証～

彫刻

33 勝軍地蔵（鹿児島県指定）

鹿児島県下最古級の木仏像。永正３年（西暦 1506）高城城主肥後文次郎盛明が太守島津忠昌を施主とし、子孫繁栄、武運長久、領内安穏を祈願し、建立。毘沙門天、多聞天を従え、邪鬼を踏みつぶしています。

仏師は加治木の快扶（かいふ）とされています。

34 中浜地蔵（垂水市指定）

35 十三仏

その他：36　川地観音　37　高野神社のこま犬　38　太崎観音　39　脇田の地蔵　40　岩戸の観音　41　井川観音　42　ひでり仏　43　牧の薬師如来　44　俣江観音　45　岩下観音　46　内山観音　など

名勝

49 広田家庭園（垂水市指定）

江戸時代、乗舟寺の和尚による作庭とされ、昭和 42 年、鹿児島大学の西田教授によると主木の梅の大木（今はありません）、石橋など仮山石組座を主景とする風景式で全国的にも非常に少ない様式のものとのことです。

天然記念物

47 高峠のツツジ（垂水市指定）

高峠つつじヶ丘公園は、大隅半島のほぼ中央に位置し、峠の標高 722 メートルにあり、100 種類、10 万本以上のつつじが春になると色鮮やかに咲き誇ります。

48 牛根麓稲荷神社の埋没鳥居（垂水市指定）

桜島の黒神地区の埋没鳥居は有名ですが牛根麓にも大正３年大噴火で埋まってしまった鳥居が存在します。天正２年安楽兼寛より城の明け渡しを受けた島津 16 代義久は部下の伊集院久道を地頭に置き、島津家の氏神・稲荷神社を創建しました。

史跡

50 岩屋観音堂跡と石塔群（垂水市指定）

鎌倉初期から室町期。山伏の修行道場がありましたので道場観音とも。財宝伝説があります。

51 島津氏久逆修塔と石塔群（垂水市指定）

南北朝時代、島津第６代太守氏久は南朝方肝付兼重等を討つ際、武運長久や死後の供養のために逆修塔を建てました。

史跡

52 浦川内石塔群（垂水市指定）

室町初期と推定。山川石でできています。

53 段の五輪塔（垂水市指定）

石質は粗い凝灰岩で高さ 90 ㎝。鎌倉期から室町初期と推察されます。

54 宝塔（垂水市指定）

仏塔のひとつ。天文 13 年（西暦 1544）、伊地知重武が下大隅を平定した時、月海寺を建立し、この塔を建てたと推定されます。梵字が刻まれています。

55 宮脇（玉照寺跡）の石塔群（垂水市指定）

玉照寺は江戸時代、心翁寺四世竜谷和尚により開山。石塔群は室町期のものとされ、当時新城は肥後氏の支配下にあり、その後伊地知氏へと移りました。

56 諏訪石塔群（垂水市指定）

宮脇（玉照寺跡）の石塔群と同系統のもので同じ室町期のものと推定されます。この石塔の中に板碑が１基ありますが、垂水市内で初めて発見された、歴史研究上貴重なものです。

57 宇喜多秀家潜居跡（垂水市指定）

天下分け目の関ヶ原の合戦に敗れた豊臣政権下５大老５奉行のひとり、宇喜多秀家は薩摩へ落ち延びます。西軍で共に戦った、島津義弘は、垂水市牛根の平野家に命じ、手厚くかくまい、幕府に助命嘆願をします。秀家は２年余りここに潜居した後、八丈島へ流され、八十余歳でこの世を去りました。

その他：58　二川の石塔　59　弁天　60　花蔵院跡　61　入船城跡と安楽備前守の墓　62　みささぎ　63　六地蔵塔　64　牛根地頭島津越前守の墓　65　島津斉彬の造船所跡　66　磨崖仏　67　早崎の塁と咲花平　68　臨海庵跡　69　江之島の公卿石　70　桜島焼亡塔　71　松岳寺跡と石井氏の古石塔　72　寿岳山西福寺跡　73　浦役屋敷跡　74　田上地頭敷根中務少輔頼賀の墓　75　孝子市太郎の墓　76　上之宮古石塔群　77　新光寺跡と五輪塔群　78　福寿寺跡と伊地知氏の石塔群　79　馬込の五輪塔群　80　俣江の石塔群　81　相良リンコウの墓と石塔残欠　82　国一どんの墓　83　山之口五輪塔　84 石幢（せきとう）　85　浄珊寺跡　86　本城宝塔群など

書籍・典籍（垂水市指定）

87 近世文学書類

88 奉納短冊

田の神　～野辺にたたずみ豊作を祈る～

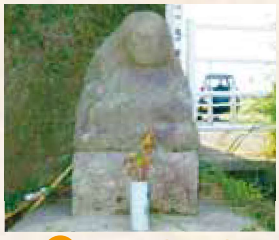
南九州特有の田の神さあは、稲作をつかさどる神で、古代には食飯魂命（ウガタマノミコト）と言われていたのが、後世に田の神と呼ばれるようになりました。春になると山の神が里に下って田の神となり、秋のとり入れが終わると山に帰っていくと信じられていました。

拝めば豊作になり幸福が訪れると、今でも花や水が供えられているものもあります。

※廃仏毀釈で壊されましたが比較的状態の良い田の神の表情は、区作に泣きながら、豊かな実りを祈った人々そのもののようです。

※廃仏毀釈：明治初年、政府の神道国教化政策、仏教排斥運動。仏堂・仏像・経文などが破壊された。

89 1号（新城）


90 2号（原田）

91 4号（田上）

92 5号（市木）

93 6号（中俣）

94 7号（宮崎小路）

95 8号（松ヶ崎）

96 10号（深港）

97 12号（中浜）

郷土芸能、伝統行事　～後世に伝えたいふるさとの宝～

98 境棒踊り

99 二川棒踊り

100 中俣（下）川踊り

101 大野原棒踊り

102 八丁杵（原田）

103 浜平相撲甚句節

104 大津絵節（柊原）

105 新城鎌ん手踊り

106 御所の御庭踊り（新城）

107 浦川内の甚句節（新城）

108 おろごめ（柊原）

109 壁うっくじい（柊原）

垂水には多くの郷土芸能が伝承されていますが、その多くが兵士の士気を高めたり、五穀豊穣を祈願するものです。伝統行事には藩政時代から続く馬追いの行事“おろごめ”や、子孫繁栄を願う“壁うっくじい”など、ユニークなものがあります。

昨今は少子、高齢化などが原因で、伝承が年々難しくなっています。

垂水人形

～素朴な土人形・鹿児島県伝統的工芸品～

垂水島津家の「八百姫（やおひめ）人形」

文禄・慶長の役（西暦 1592 ～ 1598）の時に、島津義弘が伴い帰った陶工たちが土人形を製作したのが、垂水人形のおこりと言われています。
垂水島津家でも職人を招き、娘、花嫁、福神、犬、猫、鯛などの人形が作られました。やがて垂水人形は冬場農家の副業になり、大正の初め頃は 20 軒の製作者があり、1 年に 800 個も作られたそうです。大隅半島から志布志方面まで販路も拡大し、隆盛を極めていました。しかし、昭和 10 年（西暦 1935）頃からすたれ、戦後一時途絶えました。垂水人形は素焼きの土人形で、こねた粘土を型わくに入れて型を作り、乾燥させたものを素焼きにして、胡粉を塗り、その上に色づけした素朴なものです。
大きさは 12 ～ 60 ㎝、3、5 月の節句に飾られ、昔から厄時災難を除き、出世開運、子どもの健やかな成長、幸運を祈願する意味を持っていました。戦後から途絶えていましたが、帖佐人形や残っている垂水人形の原型を参考に平成元年（西暦 1989）に復活しました。なお、垂水人形は鹿児島県の伝統的工芸品に指定されています。

民話・伝説

～「江之島弁財天」「河童と尻無みな」～

⑩「江之島弁財天」

悪人の鱶九郎は手下十数人と共に現れ、人さらいをするので人々から恐れられていました。今度も十二人の娘を捕まえて敷根（現霧島市）辺りから舟を出しました。おぼろ月の静かな夜にギッチラギッチラと櫓を漕いでいましたが、桜島と早崎の間の※瀬戸海峡を通り抜ける頃、急に霧が立ち始め一寸先も見えなくなりました。海峡は流れが早く溶岩や浅瀬も多くとても危険な所です。舟は流され鱶九郎たちは慌てふためいていました。

その時、たいそう美しい娘が立ち上がり「私の言う通りに舟を進めて下さい。きっと助かります。」と気品のある声で言います。従わなければならないような不思議な力があります。鱶九郎はこんな美しい娘が混じっていたのかと思いつつ「この弁天様の言うとおりにせよ。」と命じます。手下たちは娘の言うとおり一生懸命、舟を進めます。

流れに巻き込まれながらもそのうち櫓も軽くなり、どうやら危険を脱したようです。やがて小島が近づいてきて「この島に舟をつけて一休みしましょう。そのうち霧も晴れてきましょう。」と娘が言い、ザ・ザ・ザーッと舟底が砂浜にめり込み、舟は止まりました。心配そうな女たちに娘は「ここは弁天島です。この島の神様がきっと皆さんを助けて下さいます。信じて下さい。私は様子を見て来ます。」と言って浜へ降り、少し弁財天（べんざいてん）を祀る神社に登って行きました。小さな島で逃げられまいと鱶九郎は娘を追いませんでした。

手下たちも女たちも疲れ果て、眠り込んでしまいました。やがて霧も晴れ、東の空が白んできて鶏も一しきり鳴き出すころ四・五艘の舟が矢のように近づいてきます。弓矢をかざした役人が舳先に立っています。

慌てて鱶九郎たちや手下たちは逃げようとしましたがあっという間に一人残らず捕らわれてしまいました。

女たちは全員保護されましたがあの娘が帰ってきません。役人達は島中を捜しましたがどこにも姿がありません。

そのうち弁財天の小さなお堂の中に像を見つけ、女たちは口々に「あの方のお顔にそっくりです。弁天様が救ってくださったのです。」と合掌し、深々と頭をさげたのでした。

鱶九郎が“弁天様”と思わず言った美しい娘は本物の弁天様だったのです。

※大正３年桜島大爆発で大隅半島と陸続きになるまでは「瀬戸海峡」がありました。

⑪「河童と尻無みな」

新城麓の馬形川上流の青々とした滝壺に、神通力を使う、悪賢い河童が住んでいて、人や家畜に被害を与えるので、村人から恐れられていました。ある日、近くの薬師観音寺の妻女が川べりで野ビルをつんでいると、一人の老人が声をかけてきました。門徒だと思い、挨拶を交わしましたが老人は後ろから妻女を押して川へ落としてしまい、妻女は死んでしまいました。河童の仕業と思ったお寺の住職は、非常に怒って何とか懲らしめてやろうと滝壺の岩壁に大日如来を表す梵字「バーン」を刻み込み、その威力で河童を呪縛し、封じ込めようと考えました。岩壁は滝のすぐ横にあるので上から吊るしたブランコのようにして腰かけた状態で一心不乱にのみをふるいました。

「此の滝や河中に住む河童よ、此の字が輝く限り、今後一切此所に住むべからず、人畜に加害をする事能わず、ここに厳しく河童を封ず。喝！」住職は河童に届けとばかり大声で叫びました。それでも河童は夜な夜なあらわれてはこの梵字を爪でひっかいて消そうとしますがコケや土が剥がれてますます光り輝きます。

河童はとうとう観念し、被害はなくなりました。

この馬形川には今でも他では見かけない不思議な貝が生息しています。しまかのこばい（アカマイ科）と言い、巻貝の一種です。どの貝も小さな穴があいていて「河童は人の尻をぬくと言うがそれができなくなった腹いせに貝に穴を空けるのだ。」と村一番の物識りが教えたそうです。岡山県久米郡市岡村誕生寺の境内を流れる片目川の片目魚の伝説もこれとよく似ています。

※垂水にはたくさんの民話や伝説が残されています。民話・伝説垂城奇話は 300 円で販売しています。

近世垂水の偉人

～和田英作と瀬戸口藤吉～

日本洋画壇の巨匠，**和田英作**

和田英作は、明治７年（西暦 1874）、垂水市田神に父秀豊、母トヨの長男として生まれました。

４歳の時に故郷を離れ、同 20 年、東京の明治学院予科Ｂ組に入学した後に、上杉熊松、曾山幸彦、黒田清輝といった名立たる画家から手ほどきを受けました。白馬会の結成にも尽力し、会員となっています。また、東京美術学校西洋画科開設に伴い、助教授にも任ぜられ、文部省留学生としてパリへ留学し、「思郷」がサロンに入選しました。国内外から数々の勲章を授与され、文展審査委員、東京美術学校校長等にも任ぜられ、公的な場では帝国劇場の天井画と壁画、東京駅中央停車場の壁画、皇居内の生物学御研究所の「薔薇」等を描いています。

昭和 15 年（西暦 1940）には、法隆寺金堂の壁画の模写を始め、昭和 24 年（西暦 1949）１月 26 日に法隆寺が焼失した際にこの模写が大変役に立ったとされています。因みにこの日の教訓を活かそうと毎年１月 26 日は「文化財防火デー」として、全国を挙げて文化財に対する防火の意識を高める消防訓練などが行われています。

昭和 18 年（西暦 1943）には湯川秀樹博士らとともに文化勲章を受章し、晩年は静岡県清水市（現静岡市）の三保松原にアトリエを設け、富士山を描きつつ、『渡頭の夕暮』『思郷』その他数多くの名画を残しました。黒田清輝、藤島武二とともに日本洋画壇の三先達と言われ、わかりやすく優しい具象画を得意とした和田英作は昭和 34 年（西暦 1959）１月３日 84 歳で死去、東京多摩霊園に静かに眠っています。

「和田英作」

「渡頭の夕暮」

「赤い燐寸」

⑫「和田英作使用の画室」

行進曲の父，**瀬戸口藤吉**

「瀬戸口藤吉」

「瀬戸口藤吉翁記念行進曲コンクール」

「瀬戸口藤吉翁を偲ぶ演奏会」

⑬「顕彰碑」

瀬戸口藤吉は、明治元年、垂水市田神に瀬戸口覚兵衛の次男として生まれ、薩摩藩の役人だった父の弟、大山軍八の養子となり、神奈川県横須賀の海軍軍楽隊に入隊します。

鳥山啓作詞の「軍艦の歌」で初めて作曲し、同曲を吹奏楽による行進曲に編曲した『軍艦行進曲』を観艦式で初演奏して、国民の心と魂に大きな感動を与えました。その後、大山軍八との養子縁組を解消し、再び瀬戸口姓へ戻り、海兵団付楽長として軍艦八雲、三笠、敷島、出雲に乗艦。アメリカ殖民 300 年記念万国陸海軍式典には楽長として派遣され、米国、ヨーロッパ各国を訪問、その際に聴いた交響管弦楽団の演奏に感動して、管弦楽の必要性を強く感じ、その結成に力を尽くします。

日比谷公会堂で管弦楽団による演奏会を開催。「軍艦行進曲」を管弦楽団用に編曲した『軍艦マーチ』を演奏し、観衆に大きな感動を与えました。明治天皇御大葬儀をはじめ、昭憲皇太后御大葬儀、大正天皇御即位大禮において指揮しました。

50 歳で海軍軍楽特務少尉定年退官し、同年帝国劇場で退官記念の告別演奏会が華々しく開催されました。退官後も東京帝国大学音楽部をはじめ多くの大学で指導する一方で各地に数多くの少年鼓笛隊を設立、指導しました。70 歳で内務省情報部選定詩『愛国行進曲』の作曲に応募当選して、レコードは百万枚売り上げを記録しました。大日本音楽協会より内閣総理大臣賞を受賞し、日比谷公会堂で軍艦行進曲 40 周年記念演奏会が開催されました。

昭和 16 年（西暦 1941）脳溢血のため永眠、神奈川県横須賀の常光寺で葬儀が営まれました。享年 74 歳。

※歌詞のあるものが「軍艦の歌」、歌詞のないものが「軍艦行進曲」、「軍艦行進曲」を管弦楽団用に編曲したものを『軍艦マーチ』と言います。軍艦マーチは世界三大マーチの一つに数えらえています。

文化財マップ

※番号は所在地を表していますが、
正確な位置についてはお問い合わせください。
垂水市教育委員会社会教育課
TEL 0994-32-7551

参考・引用文献
垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書 2,3,5,6,7,9,10
垂水市史（上巻）
垂水史料集（三，五）

発行者：垂水市教育委員会社会教育課
印　刷：有限会社　垂水中央印刷